

ネパールにおける言語調査状況*

鳥羽 季義

The Research Situation of Languages in Nepal

Sueyoshi TOBA

要旨：南アジアの小国ネパールは多民族・多言語国家である。この国の数多くの言語について今日までたくさんの研究がなされてきた。その概要を述べる。

キーワード：多言語国家(multilingual nation) 少数民族語(minority language) 危機言語(endangered language) 言語調査(language research) 研究状況(linguistic study status)

1. 多言語国家ネパール

ネパールはインド共和国と中華人民共和国の間に位置する北海道の二倍弱の大きさの小国であり、ヒマラヤ山脈を背にする高山とインド平原に連なる低地から成っている。

地理的多様性と長い間の民族移動によって国内にたくさんの民族が住み、多くの言語を話す人々が共に暮らしてきた。それにもかかわらず、言語紛争は起こらず、互いに認め合って共生してきたといえる。しかし、この国の支配者は「一つの国一つの言語」という政策を打ち出し、ネパール語を国家の言語にしようとして教育に強制的に介入した。

1990年の民主化運動により、この方針は改められ、多言語国家との宣言がされて、それぞれの言語集団は自分たちの母語を公に用いるようになり、読み書き教科書などが作られるようになった。

2. 十九世紀に来た外交官の言語収集

ネパールが鎖国を続けてきた間にも、東インド会社はひそかに外交官を入国させて交流を絶やさなかった。当時は外交と言っても広くできる状態ではなかったためか、B. H. Hodgson は余った時間をネパールの博物学上の調査、そしてついには言語調査まで行い、その結果をインドの学術誌に発表した。彼はカトマンズの外に出ることを許されなかったというが、各地のネパール人がカトマンズに来るのを利用して言語収集をしたようである。後に北東インドのダージャーリングに移ってから、言語調査を継続し、そこに働きに来ていた各種の民族語を話す人々と会い記録した。彼が集めた言語データは古く正確さに欠ける点もあるが、貴重な資料であることは間違いない。

3. インド言語調査報告

20世紀初頭インドから *Linguistic Survey of India* と呼ぶ膨大な言語調査報告書が公にされた。そこにはインド亜大陸の諸言語の記述が概略化されていて、短い文法記録と語彙表も載っている。もちろんすべてではないにしろ、当時知られていた多くの言語を網羅していた。これが復刻版として出たばかりか、縮約版まで出版されて、言語研究者たちに利用された。しかし、記録はかなり古く、新しい調査研究が待たれるようになって、1960年代から西欧の研究者がネパールのフィールドワークをし始めるようになり、たくさんの報告がなされる状況になった。

4. 国際言語研究協会 (Summer Institute of Linguistics, SIL)

ネパール国立大学と提携を結び、1968年より諸言語の調査を始めた SIL は、外国人調査研究者をネパール国内各地に送り、現地に住み込んで言語研究を科学的な方法に基づいて開始した。テープレコーダーを用いて音声を記録したり、いろいろな口伝、物語を収集分析し、音韻、文法、辞書などを数年以上費やしてまとめ、調査結果を学会で発表したり論文にしたり、博士論文として提出したりしている。1970年代にすでにネワール語、グルン語、スワール語、カーム語、マガール語、カリン語などネパール国内で話されているチベット・ビルマ諸語系の言語が対象となり、その研究成果が各種の報告書として公刊された。(文献目録参照のこと。)

5. ドイツとネパールの大学共同研究

1980年代には上記で述べた SIL の調査に続いてドイツからの助成金により共同プロジェクトが東ネパールを中心に詳しい調査を学生たちと共に行っている。その結果、キランティ諸語に関する研究が進み、たくさんのデータを集めることに成功したとはいえ、一つ一つの言語の文法の出版は、リンブー語を除いては皆無であった。

その頃、先の共同研究とは別に、個人的にネパール人学者らによるバンタワ語、ネワール語などの文法が発表されていることに注目してよいだろう。外国人として N. J. Allen のトルン語文法は代名詞化言語を記述した。ハユ語の記述はフランス語で書かれた唯一のもので、それ以外のほとんどの文法は英語によるものである。

6. 1990年代

この時代になると、オランダのライデン大学から van Driem による「ヒマラヤ語プロジェクト」がネパールで始まり、博士課程の学生が外国から来て調査をして論文にまとめている。このうちヤンプー語、レプチャ語、ウンブレ語、タミ語などは本の形で出版された。

米国のウィスコンシン大学からの学生たちの調査の中で修士論文にまとめられたのは、マガール語、ガレ語、マナン語、及びシェルパ語などである。

日本からも研究者がネパールを訪ね、たくさんの論文を書いている。代表的なものは

西義郎教授のもので、三省堂言語学大辞典に書かれた論文の他に、『国立民族学博物館研究報告』掲載の研究も優れた貢献として記憶に新しい。本田伊早夫のセカイ語、相生和幸のネワール語、メチェ語の研究も発表されている。筆者は長い間カリン語を学び続けているほかに、クスンダ語、タミ語、ディマール語、バラム語を調査し、その一部は辞書などとして出版している。

7. トリブーバン大学言語学部創設

長い期間にわたってネパールの大学に言語学部の設置をと運動してきたが、その夢が1997年に実現し、学生の教育が開始された。学生の論文はネパール言語学会誌に発表されるだけでなく、修士論文としてもまとめられるようになった。この学部で筆者も初期の頃フィールド言語学の講座を担当した。その当時の学生が今日では教師となって後輩を指導している。現在、博士課程を終えた者が数名おり、また在籍中の学生も数名いて、諸言語の研究に取り組んだり、言語プロジェクトに参加したりしている。このような学生たちは、将来、「ネパール言語調査計画」に加わり大きな仕事に従事することが期待されている。

8. 危機言語調査研究

最後に、ネパールにある少数民族語のうち危機に瀕した言語がいくつかあり、その文法記述や語彙収集を急がねばならないことを指摘したい。筆者は8年前にクスンダ語の資料（録音テープと単語ノート）を提供されて簡略な記述をしたが、最近西ネパールにまだこの言語を話せる人がいるということがわかり、二人の女性から聞き取りをした結果、文法書が出版されるに至ったことは喜ばしいことである。さらにまた、ドゥラ語の話者も見つかり、現在、ネパール人の研究者が調査に当たっている。

チンタン語はドイツの団体の援助で大規模な調査（テキスト収集、視覚資料分析、人類言語学研究、子供の言語習得）がされてきた。調査結果をデジタル化し資料を保存する努力も行なわれている。バラム語の調査と保存運動も外国の資金援助のもとでプロジェクトを立ち上げている。これも二、三年後には一定の成果が得られているはずである。

9. まとめ

このように1960年代から続けられてきたネパール言語調査は、今や大きく発展し、これからは国家規模の全国調査へと進んでいくことだろう。

参考文献

Driem, G. L. van (1987) *The Grammar of Limbu*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

_____ (1993) *The Grammar of Dumi*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Grierson, G. A. (ed.) (1909) *Linguistic Survey of India*. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.

西義郎 (1990) 「ヒマラヤ諸語の分布と分類・上」『国立民族博物館研究報告』15.1, 265-337.

_____ (1992) 「ヒマラヤ諸語」『三省堂言語大辞典 3』505-552. 東京：三省堂

鳥羽季義 (1998) *A Bibliography of Nepalese Languages and Linguistics*. Kathmandu: Central Department of Linguistics, Tribbuvan University.

執筆者紹介

所属：日本ウイクリフ聖書翻訳協会

Email：si_toba@sil.org